

論文

「クルアーン」が教える人間洞察（第2回）

アフマド鈴木紘司

地域文化学会理事、マレーシア現地法人役員

第2部：クルアーンの構成

2-1：章と節

イスラームの聖典クルアーンは第1章から始まり第114章で終わる「章」により区分され、構成されています。「章」の意味は“仕切る、囲む”の意で建物を囲む“塀”です。

各章の冒頭には、定型句（バスマラ：ビスマッラーヒ・ラフマーニ・ラヒーム、慈愛の主慈悲の主アッラーの御名にて）が置かれていますが、例外的に第9章だけありません。この理由として第8章と第9章を連続した1章と見なして、章の総数を113と解す異説もありますが、ウスマーン定本では正式に114章の構成となっており、114章が定説です。

各章は「節（アーヤ）」の集合から成り立ちます。「節」は単語か、文の集まりで、6,200節余ありますが、章によってその数や長さが大きく異なります。例えば、最長の章は第2章で286節からできていますが、第108章の場合は僅か3節という短さです。

「節」の語義をクルアーン中で検証すると“クルアーンの文節”を意味する他に、“印し、徴、奇跡、試練、命令禁止など”があります。以下に明らかですが、天空の太陽や月、星々の存在、大自然に現われた森羅万象が、唯一神の实在と恩寵を示す「徴（しるし）」を示し、啓示されたクルアーン章句も等位の「しるし」と解釈されているのです。

そして最長の節は、第2章282節であり、128単語、540文字から成立しています。章と節が共に引用されているのが、以下の「第24章：光、1節」です。

[本章は我がこれを下し、そして、我がこれを定めた。そして、その中に
明瞭な文節を我は下した。あなた方が思念するのを願ってのこと。]

クルアーンの特徴の一つが、全114章の各章の長さや節数の大きな差異であり、その長短を目安とする章の分類が以下の4つとなります。

- (1) 長編章：第2章から第9章までの長い章を指します。このうち第6章だけがマッカで啓示され、残りすべてはマディーナで啓示された章です。ちなみに最も長い第2章はクルアーン全体の約12分の1に相当する分量です。
- (2) 百節章：第10章以降の章で、数が100節以上、或いは100に近い節を持つ章です。このすべてがマッカ啓示の章で、13章あります。
- (3) 反復章：第13章から第49章の中で、(2)に満たない節からなる章をさします。この名称は、長い章と違って何回も繰り返し読むことで名付けられました。

全部で 27 章あり、マッカ啓示が 20 章、マディーナ啓示 7 章を含みます。

- (4) 明解章：第 50 章から最後の第 114 章までの短い章のことです。これら各章は短く纏められ意味が明らかなことからこう命名されました。

以上で見当が付くように、クルアーン章の配列は、おおむね長い章から短い章へと機械的に並んでいます。「第 1 章：開扉、7 節」だけは毎日の礼拝に必ず朗読されて、他の章とは別格に取り扱われます。ちなみに経典半分の境目は、第 18 章 19 節です。

こうして章と節がクルアーン全体の分量を知る目安とならないため、全体を 30 に均等分割した分け方があります。これは内容と関係なく分量を基準として便宜的に設けたもので、“部”という区分で呼びます。クルアーンを朗読するときに、毎日 1 部を朗読すれば 1 ヶ月で完了できます。

2-2 各章の名称

クルアーン各章は「数字」で識別する他に、各章に特別に付された「章名」があります。この名称は、各章の内容の中で重要、且つ象徴的な言葉を選んで預言者時代に命名されたといわれます。その証拠として、当時の不信者らが“牝牛章”、“蜘蛛章”の名前を嘲笑したことを挙げています。そして、多くの章は一つの名前ですが中には幾つかの別名や呼称をもつ章があります。その典型が第 1 章の“開扉章”であり、“礼拝、祈禱、讃美、感謝、約束、治癒、基本、光り、宝などの名前が別格的に付されています。

預言者の言葉、「本章は“クルアーンの母”であり、“書物の開扉”であり、“反復の七節”である」も有名です。

第 2 章は“クルアーンの天幕”“クルアーンの背”の呼称があります。第 3 章には、“善良”の別名があり、第 2 章と第 3 章を“二つの花”と呼称し、読む人へ真理と導きの光を与えるとされます。

第 5 章には、“契約、救助”、第 8 章は“バドル”の別名があります。第 9 章も多くの名称を持ち“解約、醜聞、懲罰、除去、調査、扇動、詮索、暴露、追放、侮辱、見せしめ、つぶやき、などですが、このように多くの名称が存在することで、本章が独立した章であるとの根拠にもなっています。

その他に知られた別名は、第 16 章“優雅”、第 17 章“イスライル族”、第 18 章“洞穴の仲間”、などで、第 36 章は“クルアーンの心臓”の呼称があり、第 55 章は定型の反復が美しいので“クルアーンの花嫁”と呼ばれます。第 65 章の“女性短編章”の別名は、第 4 章の長い“女性章”と対比して使われます。そして第 112 章“基本”が有名であり、最終の第 113 章と第 114 章は“二つの庇護章”と呼称されています。

2-3 クルアーン章の一覧

欽定版クルアーンの章名を項目別に、筆者が独自の分類を試みしたので参考までに挙

げておきます。

1) 自然に関するもの。

- A) 自然物：雷（13）、洞窟（18）、光（24）、煙（44）、砂丘（46）、山（52）、星（53）月（54）星座（85）、明星（86）、太陽（91）、地震（99）
- B) 時間：黎明（89）、夜（92）、朝（93）午後（103）、曙光（113）
- C) 動物：牝牛（2）、家畜（6）、象（105）
- D) 植物：いちじく（95）、棕櫚（111）
- E) 昆虫：蜜蜂（16）、蟻（27）、蜘蛛（29）

2) 人間に関するもの

- A) 人間：女性（4）、人間（76）、凝血（96）、人々（114）
- B) 人名：ユーヌス（ヨナ）（10）、フード（11）、ユースフ（ヨセフ）（12）、イブラヒーム（アブラハム）（14）、マルヤム（マリア）（19）、ルクマーン（31）、ムハンマド（47）ヌーフ（ノア）（71）
- C) 集団名：イムラーン家族（3）、ヒジュール（15）、ローマ人（30）、サバー（34）、クライシュ族（106）
- D) 職・種類：預言者（21）、信徒（23）、詩人（26）、部族連合（33）、整列者（37）、偽善者（63章）、中傷者（104）、不信者（109）
- E) 特定者：論争する女性（58）、審査される女性（60）、衣を被る人（73）外衣に包る人（74）、計量不正者（83）
- F) 人工物：食卓（5）、高壁（6）、戦利品（8章）、金装飾（43）、私室（49）、鉄（57）、筆（68）、天階段（70）、町（90）
- G) 状態・様子：悔悟（9）勝利（48）、戦列（61）、禁戒（66）、明証（98）、至誠（第112）
- H) 行為・動作：夜行旅（17）、巡礼（22）、識別（25）、額ずき（32）、解明（41）、協議（42）、跪座（45）、散布するもの（51）、召集（59）、集合礼拝（62）、騙し合い（64章）、離婚（65）、送られるもの（77）、引き抜くもの（79）、眉をひそめて（80）、打開（94）、疾走するもの（100）、多寡競争（102）、小善（107）、多福（108）、援助（110）

3) 超自然に関するもの。

- A) 冒頭文字：ター・ハー（20）、ヤー・スイーン（36）、サード（38）、カーフ（50）
- B) 神的存在：創始の主（35）、大赦の主（40）、慈愛の主（55）、

- 大権（67）、至高の主（87）、
- C)超自然物：妖霊（72）
- D)超現象：大事件（56）、真実（69）、復活（75）、知らせ（78）、
暗澹（81）、破裂（82）、分裂（84）、掩蔽（88）、定命（97）、
戸を叩くもの（101）

2-4 章と節の配列

クルアーンの章と節の配列が、何時、どのように決定されたかは、学者たちの意見が分かれています。

（第1説）預言者ムハンマドが存命中に順番を決定したという“既定説”です。これは伝承を根拠とし、預言者が幾つかの章を連続して朗読したことで、順序が決められたとの説です。それゆえにクルアーン配列は動かせない絶対的なものと主張します。

（第2説）信徒たちの決定にまかされたとする“任意説”です。預言者による決定ではなく、ウスマーン定本結集委員会が定めた編集方法に依拠すると解釈します。証拠として挙げるのが、後にすべてが廃棄されたという個人所有のクルアーン写本の存在であり、当時アリーが所有していた写本の配列は降臨した順となっており、第96章：凝血、第68章：筆、第74章：外衣に包る人、第73章：衣を被る人、であったこと。またイブン・アッバース所有写本が、第2章：牝牛、第4章：女性、第3章：イムラーン家族の順番であったことを挙げて、現在見る配列はウスマーン委員会により採択されたとします。

（第3説）上記2説を一緒にしたもので、クルアーンの或る部分は預言者が決定して、残りは後世の信徒たちが決定したとの説です。多くの学者はクルアーンの大部分は預言者の時代に決定され、それ以外の幾つかの章が後世に決められたと認定しています。

いずれにしても欽定版で明らかなのは、配列が啓示の降りた時系列の順番でも事項別の順列でもなく、内容的に無関係なことが特徴です。一般にクルアーンが読み辛いという理由は章の配列と並び順にあるとされ、聖書のような物語風でないことにあります。普通の小説や物語のように、読者や聞き手が理解し易い筋書きや、起承転結の配慮がまったく省略されているのです。章の配列は極めて機械的な並べ方で繰り返しが多く、意味難解の部分が沢山あって理解に苦しむというのがクルアーンを読んだ人の平均的な読後感でしょう。

日本から遠く離れたアラビア世界で、紀元7世紀の古典という事情を割り引いてもクルアーンを理解するのは至難です。この理由の一つが結集の際に、長短を目安として長い章を初めに、短い章を後に置いたという単純な配列にあります。どうしてこうなったかは預言者時代の信徒たちがクルアーンを暗誦して内容も理解していたことで、順列への配慮が必要なかったとされます。つまり書物としてのクルアーンは筆録での保管が主目的であり、暗誦

の補助的な存在に過ぎなかったのです。この事実は反面でクルアーンの記録性が極めて高いことの証左であり、評価される重要点でもあります。一冊に取りまとめられたクルアーン経典は、預言者ムハンマドの全啓示を完全に収録した歴史資料として輝きを放っているのです。

2-5、クルアーンの表記

預言者の時代から記録され、カリフ、ウスマーンにより完全に成文化されたのが、現行の「欽定版クルアーン」です。しかし原本は今日見る表記とかなり異なり、章の名称、節の番号、文字の点すら省略された無垢な形でした。前述のように学者たちの意見は預言者が既に表記までを決定したとする“既定説”と“任意説”に大きく二分されました。既定説では唯一神の命を受けた預言者の啓示は表記も定められ、これに手を加えることや一切の挿入を固く禁じ、表記方法の変更も許さないという見解でした。これに対し多くの学者はウスマーン表記がそれほど強制を持たず、技術的な側面の改定は許されると解釈しました。

何よりの証拠にカリフ自身がクルアーン結集にあたりマッカ出身の3名を優先させて、クライシュ方言を採択するように命じたことを挙げます。すなわちアラビア語の発音や表記には当時から差異があり特にこれを制約する伝承もないことから、表記は変更できるとの“任意説”が有力でした。信徒たちにとっての啓示は預言者時代から暗誦が中心であり、表記は単に記録に留めおく便法に過ぎなかったのです。さらに後代は乱れ始めた読誦法を統一する目的に重点が置かれ、正確さを期するため新たな表記が色々と考案され、現在の表記になりました。基本的にウスマーン表記法を尊重することは全学派が承認していますが、ウスマーン原本で使用された角張った字体「クーファ書体」は使用されず、現在見る「ヌスフ書体」になっていることも“任意説”の根拠です。

アラビア語表記の起源は同じセム系のナバタイ文字とされますが、イスラーム世界が広がり母国語が違う信徒が増加すると、文法を示す母音記号を付すことや、色彩で区別することなどが考案されました。しかし、いつの時代でもクルアーン本文に手を加えることは厳禁でした。章の名称や節の番号をはじめ現在の表記法と書体の形式が完成したのは11世紀頃とされます。これら表記の発達には美しい筆跡を競った書道家の貢献があり現在の型式となりました。それ以降は、原典の意味研究に主眼が移り、表記法の進展は殆ど見られなくなりました。

2-6 クルアーンを読解する要領

唯一神の語りとされる暗誦を中心に流布した啓示に加えて、それらを結集し取り纏めた「クルアーン経典」を書物として読むのは難しく、読み辛い側面がかなりあります。内容を正確に保持する記録のため編纂されたクルアーンなので一般書物に見られる起承転結や読者へのサービスが一切ありません。当時の人々は預言者と共に生きて背景を知っており、その理解に何の不便も感じませんでした。その後のイスラーム世界も同じ経過を辿り、

信徒たちは先ずクルアーン暗誦を幼少から始め、次第に歴史背景や内容を学ぶという方法を長く採用してきました。しかし非イスラーム圏の人間が基礎知識のないままに直接クルアーンを読もうとすると「第一章：開扉」こそは簡単に読めますが「第二章：牝牛」になった途端から、時系列が錯綜し内容が多岐に及んで、その背景が不明で理解できない状況に陥る場合が殆どであり、消化不良を起こし途中で読書を投げ出すのが普通と言えるでしょう。

クルアーンを書物として読了するときには、それなりの工夫をこらすのが必要なのです。クルアーンを紐解く際のお勧めは、読みやすい順番を選ぶことで宗教書だからといって、律儀に初めから順次読むことに捉われないことが大切です。例えば、第1章、第2章と読んでみて、難しくなったらそこで止め、第12章：ユースフ、第18章：洞窟、第19章マリヤムへと飛んでみるのも一方法です。さもないければ、いっそ最終章の第114：人々、の反対方向から前へと逆に読み進める方法もあります。または、自分が興味ある章名を拾いながら、読みのも良いでしょう。ある程度まで全体像を把握しないと理解しにくい経典なのです。本書ではクルアーン啓示が下された時系列に沿って読解する方法論を特に採用しました。

なお各章を読む場合にはその始まりと終わりの部分を精読することに注意を払いましょう。クルアーン各章の冒頭には第9章を除いて“慈愛の主 慈悲の主 アッラーの御名にて”の節句が置かれています。信徒の日常生活では行動を始める時この句を唱えるのが習慣化、定着しています。そして各章の最初の文章がどう始まるかも、重要な検証項目となっており、以下の10種類に分けられます。

- (1) 唯一神の讃美から始まる章：これには3形式があり、総計14章あります。
 - ① アルハムド リッラー：あらゆる讃美はアッラーのもの
= 1, 6, 18, 34, 35、の5章がこの節句で始まります。
 - ② タバーラカ（祝福あれ）= 25, 67、の2章の始まりです。
 - ③ スプハーナ（讃えまつる）= 17, 57, 59, 61, 62, 64,
87、の7章が語幹(SBH：讃える)の派生形です。
- (2) 呼び掛けから始まる章：呼びかける対象が以下の通りに分かれ、計10章あります。
 - ① 信仰する人たちよ。= 5, 49, 60、の3章。
 - ② 預言者よ。= 33, 65, 66、の3章。
 - ④ 衣を被る人よ。= 73、の1章。
 - ⑤ 外衣に包る人よ。= 74、の1章。
 - ⑥ 人々よ。= 5, 22、の2章。
- (3) 叙述文で始まる章：通常動詞文、名詞文から始まり、総計23章となります。
例：汝に訊ねるであろう、戦利品につき。= 8, 9, 16, 22, 23, 24, 39,
47, 48, 54, 55, 58, 69, 70, 71, 75, 80, 90, 97, 98,

101, 102, 108、の23章。

(4) 命令文で始まる章：命令文から始まります。総計6章があります。

例：告げよ。「私に啓示されたのは、ジンの一団が聴き入ったこと。・・・」＝
72, 96, 109, 112, 113, 114、の6章。

(5) 誓言から始まる章：誓言とは特別な定型をとる“誓いの言葉”であり、人間が唯一神アッラーに対して行うものです。人々へ信念を植え付け、強調を意図する表現形式ですが、クルアーンでは唯一神の創造の“神兆、徴 (Ayah)”である大自然の事象を選んで誓う定型を取っています。総計15章の始まりがこの形式です。

例：整えて整列するものにかけて。＝ 37, 51, 52, 53, 77, 79, 85, 86, 89, 91, 92, 93, 95, 100, 103、の15章。

(6) 祈祷から始まる章：呪いの句から始まるもので、計3章です。

例：災いあれ。計量をごまかす者達に。＝ 83, 104, 111、

(7) 条件助詞で始まる章：“～のとき”という条件文から始まり、計7章あります。

例：重大事が起こる“とき”＝ 56, 63, 81, 82, 84, 99, 110、の7章。

(8) 疑問助詞で始まる章：疑問文からはじまり、計6章があります。

例：人間には、何とも呼び得なかった期間の一時が“なかったか”。＝ 76, 78, 88, 94, 105, 107、の6章。

(9) 慣例句から始まる章：これは特別な用法であり、1章しかありません。

例：クライシュ族を“護る慣わし”のため。＝ 106

(10) 開章文字から始まる章：謎に包まれた神秘的なアラビア文字（アルファベット）の羅列です。正式名称は「開章文字」ですが、通称は“神秘文字”とも呼びます。各章により配列や文字の数が不規則で統一されていませんが後述します。

なお、各章の終わりの部分は、他の章へ如何に続いて行くかを知る手掛かりになるということも付言しておきます。

2-7 啓示の背景分析

クルアーン理解を深めるために学者たちは早くから啓示の背景や関連を検証する作業を行ってきました。その読解を助ける有効な手段として、西欧研究者は章の配列を年代順に並び変えることを試みましたが、アラブ学者の研究手法との差異が指摘されています。中で最も重要視された点は、聖典は個人で変更ができず、私見の挿入が許されないとの宗教的観点に立脚する基本原則の相違でした。アラブ学者はすべての啓示が何時、何処で、どのように降臨したか確認する作業を徹底し、啓示の分類を行い、詳細な分析をしてきました。そこには西欧学者がよく行う、伝承の吟味の省略や個人的な類推手法の偏りを許しませんでした。

その結果、預言者ムハンマドの啓示の降臨が、伝道に専念して唯一神の存在を語り、来世

を警告したマッカ時代のものか、生活の地をマディーナに移して社会全体を導く政治的指導者として日々起きた事態への対処や裁決を迫られた頃の啓示か、それとも旅行中の他の場所で下りたのか、昼間の啓示か、夜間なのか、夏と冬いずれの啓示か、寝床で睡眠中か、など仔細が検討されたのでした。ムハンマドの人生に大きな転機をもたらしたマディーナ移住が、環境の違いや情勢変化により、啓示内容や文体に影響したのは歴然であり、この差異を学ぶことが啓示分析上で重要なこととなったのです。

クルアーン学者たちは、啓示を「マッカ啓示」と「マディーナ啓示」に分類して比較検証する特別な研究分野を開拓しました。両啓示を区分する定義や、その基準をどう定めるかで論争が展開され、基準を場所にするか、対象となる人間か、時間なのかに絞りました。

「場所」を基準とするならば、マッカの聖域を中心に近郊のミナ、アラファート、フダイビーヤなどを含む場所となりますが、それ以外の場所はどうなるのか、さらに預言者が晴れてマッカに凱旋して降りた啓示をマッカ啓示と認めるかどうか問題となりました。同様にマディーナでも近郊のバドルだけでは括れない場所も出てきました。

次に「人間」を基準とする区別は、マッカ住民を対象とするか、マディーナ住民への啓示か、その対象の人々が不明の場合はどうするか適用に難がありました。

結論として「時間」を基準とする区分が採用されたのです。すなわち、ムハンマドがマッカで生活してマディーナ聖遷（ヒジュラ）を実行する以前の啓示の全てを「マッカ啓示」とし、聖遷（ヒジュラ）以後のものを「マディーナ啓示」と決定したのです。

この区分による結果、全114章で、マッカ啓示の章が“計86”であり、マディーナ啓示が“計28章”でした。しかし多くの長い章では、マッカとマディーナで啓示された節が混在していますし、節によっては二度降臨したとされる章があることも判っています。

2-8、 啓示区分の判定基準

啓示を区分する判別は、次の二つの方法に委ねました。

（第1の方法）ハディース伝承を中心に歴史資料を丹念に追って判別するやり方です。これは同じ世代に生きて預言者の言行を実際に目撃した教友たち（サハバ）の正確な伝承（ハディース）を選択して、啓示がいつ、どこで下されたかを検証し確定する地道な作業で判定します。これを裏付けるのが「神の書として啓示された内容の真意はアッラーしか判らない。しかし啓示が何処で誰に降臨されたのかは、私たちがよく知っている。」というイブンマスウードの伝承です。

（第2の方法）啓示を判別する一定の原則に従い、論理を働かせて判定するやり方です。推論を行うために必要な根拠や規定では、個人の独断や自己解釈は許されず、多くの学者から認定されねばなりません。しかしこれはあくまで第一の方法より低位とされ、副次の位置にあるとされます。

マッカ啓示を判別するために推論となる特定事項は、以下の通りです。

(1) [サジダ節]と呼ばれる特別な節句があるもの。“サジダ”とは礼拝形式のなかで“額を地につけ平伏した姿勢”をさします。この特別節を耳にした信徒は、すぐさまその場で額づくことが要求されます。この特別節がある節は全てマッカ啓示とされ、7:206、13:15、16:50、17:109、19:58、22:18と77、25:60、27:26、32:15、38:24、41:38、53:62、84:21、96:19、の15箇所です。なお、第13章、第22章はマディーナ啓示に分類されますが、この部分だけマッカ節が挿入されたと解釈されています。

(2) 強意の否定語である“カッラー（決してそうでないの意）”が使用されている節。この強い打ち消しの単語は、初期のマッカ啓示にしか現れてきません。

(3) 呼び掛け文「人々よ」だけがあり、同じ章に「信徒の者よ」の言葉が併存しないとき。信徒たちの表現はマディーナ啓示だけに使われました。

(4) 人類の祖であるアダムと悪魔イブリースの物語がある節。初期の啓示のみ現れました。ただし例外はマディーナ啓示の第2章：牝牛ですが、この物語の部分だけマッカ啓示節が挿入されたと推論されます。

(5) 昔の預言者たちや滅亡した古代都市の物語が出てくる文節。ノア、アブラハム、モーセなどのヘブライ預言者の物語や、神の怒りで亡ぼされたシドン、ソドムの町の話がでてくる章で、例外は第2章、第3章ですがこれも、その文節部分だけはマッカ啓示といわれます。

(6) 章の冒頭に神秘文字が出てくるもの。章の始まりに、S、YS、ALM、というようにアラビア語の冒頭文字が神秘的に掲げられているのはマッカ啓示です。例外として、第2章、第3章、第13章の三つの章がマディーナ啓示です。冒頭神秘文字については別章で詳しく説明します。

マディーナ啓示を判別する特定事項は以下の通りです。

(1) 聖戦（ジハード）に関する内容を含む文節。マッカ時代には一切戦った記録がありません。戦闘はすべてマディーナに移住して以降です。ムハンマド自身が司令官をつとめ全軍を指揮した戦役は26回を数え、派兵は38回に上ります。戦いは常に防衛と和平を主体としており、略奪や侵略、圧政を目的としませんでした。

(2) 偽信者について記述がある文節。マッカで偶像を崇拝する多神教徒は頑迷で粗暴でしたが単純でした。反対にマディーナでは、表面だけ信徒を装いながら裏に廻って敵となる偽信者の出現に直面します。偽信者に言及した章はすべてマディーナ啓示です。例外は第29章ですが、1～11節までの部分だけマディーナ啓示が挿入され、残りの節がマッカ啓示です。

(3) 経典の民（ユダヤ教徒、キリスト教徒）への呼びかけや、彼等との論争を含むもの。ムハンマドが彼等と直接に接触が深まったのはマディーナ移住後でした。

(4) 律法に関する詳細な説明がある文節。例えば、礼拝、断食、喜捨、巡礼などの詳しい宗教義務、売買契約や利息の禁止などの商法、結婚や離婚、遺産相続の民法、盗みや殺人への刑罰を定めた刑法規定など、多彩で広範囲に及ぶ律法は、すべてマディーナで新たな共同体を建設するときに必要となった啓示です。換言すれば啓示が社会を律する機能を果たしたということであり、後代に確立されるイスラーム法の多くがマディーナ期の啓示を基本としています。マディーナ啓示の文体は、おおむね章と節が長くなり、言葉使いが悠長であることが特徴です。